

山形新聞 2021年10月02日付 論説解説

ム

シ

ス

ム

(第三種郵便物認可)

第48911号

(6)

論説・解説

近世から近代にかけて紅花の生産で隆盛を誇った中山町の旧柏倉家住宅（九左衛門家）は2017年、土地と建物が町に寄付され、19年に国重要文化財（建造物）に指定された。現在、町教育委員会が土日祝日に一般公開している。

豪農の暮らしぶりを伝える主屋、漆塗りや金箔が施され、あつい信仰心がうかがえる仏間、特別な来客を迎える腰敷（非公開）など8棟から成り、明治期の上賣農家建築と高く評価されている。

建物と一体になつて大きな空間を創り上げている。庭園のは庭園で、NPO法人黒磯の里山保存会などが庭の管理に当たっている。その庭園文化に光を当てる講演会が9月中旬、同町で開かれ、尼崎博士京都芸術大教授が造園学の視点から解説した。同住家を見学する際の参考となるよう講演の一端を紹介したい。

△ ◇ 旧柏倉家の庭園で注目すべきは裏手の丘陵から流れてくる水を、治水も考えながら上手に使っている点にある。裏手に築いた土手で水を受け止め、ため池から敷地内に用水を引き込んでいる。

回遊ができる庭園「池山水」は主屋の上座敷からの眺めを最も重視している。柏倉家の代、14代当主は煎茶をたしなんでいた。煎茶建築は自然特に水との関わりを重視する。その様式に沿って座敷からの眺め是非常に開放的で、庭園と一体化しているように感じられる。正面の軒下に導かれ、新たな水の修景をつくり出している。主屋から排水できる

マルチアングル

旧柏倉家住宅の庭園

論説委員 石井秀明

△ ◇ 「い」と助言した。

旧柏倉家住宅の調査に携わった建築の専門家は「訪れるたびに、いろんな発見があつて興味深い」と語っているが、庭園においても随所に匠の技が駆使されていることを理解できよう。

一般公開では町教委員会によるガイド3、4人が邸内の見学ドローンを解説してくれる。来春の種まきを得て紅花畠と里山に開まれた屋敷は11月に入る

りや金箔が施され、あつい信仰心がうかがえる仏間、特別な来客を迎える腰敷（非公開）など8棟から成り、明治期の上賣農家建築と高く評価されている。

豪農の暮らしぶりを伝える主屋、漆塗りや金箔が施され、あつい信仰心がうかがえる仏間、特別な来客を迎える腰敷（非公開）など8棟から成り、明治期の上賣農家建築と高く評価されている。

建物と一体になつて大きな空間を創り上げている。庭園のは庭園で、NPO法人黒磯の里山保存会などが庭の管理に当たっている。その庭園文化に光を当てる講演会が9月中旬、同町で開かれ、尼崎博士京都芸術大教授が造園学の視点から解説した。同住家を見学する際の参考となるよう講演の一端を紹介したい。

△ ◇ 旧柏倉家の庭園で注目すべきは裏手の丘陵から流れてくる水を、治水も考えながら上手に使っている点にある。裏手に築いた土手で水を受け止め、ため池から敷地内に用水を引き込んでいる。

回遊ができる庭園「池山水」は主屋の上座敷からの眺めを最も重視している。柏倉家の代、14代当主は煎茶をたしなんでいた。煎茶建築は自然特に水との関わりを重視する。その様式に沿って座敷からの眺め是非常に開放的で、庭園と一体化しているように感じられる。正面の軒下に導かれ、新たな水の修景をつくり出している。主屋から排水できる

ようするなり機能性への配慮もある。主屋前にある石造りの洗い場は大掛かりだ。階段で「あり、働き手が異なる方向から出入りできる。洗い場の敷石のうち、水がまわりやすい部分には排水用の浅い溝が掘られている。洗い場の利用状況を熟知した石工の技である。

前藏の庭では、一筋の飛び石が蹲踞（くわぐら）と神聖な礼拝石に向かっている。こうした形態は津軽地方の大石武学流庭園に見られる。別の飛び石が象徴的な石にぶつかり、迂回してから水盤に向かう形式も興味深い。層塔型の石灯籠は出来巣（くわく）の来待石（うきまつせき）で、津軽地方にも存在している。奥にある立石は、石を二つに割って組み合わせた「合わせ石」で、庭の入れを進めたことでその構造が判明した。

△ ◇ 佛間近くの庭では来待石の層塔型石灯籠（木の化石「珪化木」）が用いられていてきれいに加工する「光付け」が施されている。石材でここまで丁寧な造りは珍しく、石工の情念が感じられる。

尼崎教授は、庭は、建物や暮らしと共に生き続ける存在。毎日手入れをすることでの良さが浮き出て、語り掛けづるようになる。文化財としての価値を守りながら、感動を共有できる新たな空間を創造してほしい」と助言した。

建物と共に生きる大空間

社説

決着を見る。だが象徴天皇制を支える皇室前途は厳しい。安定的な皇位承継に向けた方策はまだ定まらない。眞子さま

天皇誕生日
佳子

承認